

奨励金No.1650

HPV ワクチン接種対象者の意思決定に影響する価値観の調査・分析

広瀬 一隆

京都府立医科大学 博士課程学生

Survey and analysis of values that influence the decision-making of those targeted for HPV vaccination

Kazutaka Hirose

Kyoto Prefectural University of Medicine, PhD Student



子宮頸がんなどの原因となるヒトパピローマウイルス（HPV）の感染を防ぐ HPV ワクチンのキャッチアップ世代を対象として、ワクチンを接種するかしないかの姿勢の背景にある要因を探った。インタビュー調査を約 20 人に実施し終えて、現在、内容の分析にあたっている。また、日本国内の千人を対象としたアンケート調査も近く実施予定である。

I investigated the factors underlying attitudes towards whether or not to receive the HPV vaccine, which prevents infection of the human papillomavirus (HPV)—a cause of cervical cancer and other cancers—among the target age group for the catch-up vaccination programme. Having completed interviews with approximately 20 people, I am currently analysing the findings. I also plan to conduct a questionnaire survey of 1,000 people in Japan in the near future.

1. 研究内容

1. 研究の背景と目的・意義

背景

2019 年は世界で年間計 69 万人（女性 62 万人、男性 7 万人）が HPV（ヒトパピローマウイルス）を原因とするがん罹患しており、日本国内でも年間約 3 千人が子宮頸がんで死亡している。HPV 感染を防ぐために HPV ワクチンが重要とされ、日本では 2013 年 4 月に小学 6 年から高校 1 年の女性を対象に無料の定期接種が導入された。しかし、副反応の懸念から、政府は 2013 年 6 月より積極的勧奨を停止し、2022 年 3 月までこの状態が続いた。この間、接種率は 1%を下回る状況にもなったため、接種機会を逃した世代（1997 年 4 月 2 日～

2008 年 4 月 1 日生まれ的女性）を対象として、2022 年 4 月から 2025 年 3 月まで無料で接種できる「キャッチアップ接種」制度が設けられている。

2. 目的と意義

本研究の目的は、キャッチアップ接種の対象世代にインタビュー調査とアンケート調査を行い、HPV ワクチン接種に関わるさまざまな考えや価値観を提示することである。これまで意思決定の背景にある価値観をより深く探索するインタビュー調査や質問紙調査は少なく、本研究の意義は大きいと考える。また、キャッチアップ接種の実施を判断する場合は、すでに 18 歳以上であるケースが多いため、自己決定に関する議論において、親

の影響を一定程度取り除いて検討できるという意義もある。

3. 調査の概要

対象者は、1997 年 4 月 2 日～2008 年 4 月 1 日生まれの 18 歳以上の女性である。

インタビュー調査は 2025 年 7 月から開始し、現在も継続中である。リクルート方法は、知り合いを通じて、調査協力者を募る「スノーボールサンプリング」を採用し、対面またはオンラインによる約 1 時間の半構造化インタビューを実施している。そしてその結果を Thematic analysis（主題分析）を通して分析し、それぞれの立場の背景要因を明らかにすることを目指している。

質問紙調査は 2026 年 7 月以降、国内在住の千人を対象に実施予定である。こちらは HPV ワクチンを接種するかしないかの立場によって、どのような要因が影響したかを統計学的手法を用いて明らかにすることを目指す。

なお、いずれの調査も、京都府立医科大学医学倫理審査委員会の承認を得ている。

4. インタビュー調査の暫定結果

インタビュー調査の分析が暫定的に終了した 6 名（医歯薬系や人文系の大学生・大学院生、医師など。うち接種済み 4 名、未接種 2 名）については、すでに昨年の日本生命倫理学会で報告した。現時点では、ワクチン接種をした人としていない人で、明確な価値観の違いは見出されていない。しかしながら、インタビューを通じて、以下のようなサブテーマが見出された。1. 定期接種の対象者が「女性」限定であることへの違和感 2. トランスジェンダーへの差別の批判 3. HPV の感染経路に関する理解 4. 他人のワクチン接種に対する考えの 4 点である。なお、最終的には 20 人以上の参加者に対して、インタビューを実施する予定であり、抽出された分析結果は変更の可能性はある。

5. 考察

調査の途中経過から、以下の 3 点が考察される。

1. 女性だけを定期接種の対象とすることは、男性に対する不公平感や性別二元論の強化につながるという疑問が参加者から投げかけられた。これは、子宮頸がんの発症を防ぐことを目的としている日本の現行接種体制をめぐる議論からは抜け落ちがちであった点であると推測できる。またミランダ・フリッカーが提起する「認識的不正義」の観点から、女性の対象者の声がなおざりにされてきた懸念として、倫理的にさらに議論を深められる可能性がある。
2. 主に性的活動を通じて感染する HPV ワクチンと、ほかの感染経路を持つウイルスへのワクチンの違いを踏まえて議論する必要性が示唆された。特にキャッチアップ接種対象世代は、新型コロナのパンデミック下で、ワクチン接種の判断を迫られた経験を有しており、新型コロナワクチン接種をめぐる判断と、HPV ワクチンの接種をめぐる判断の異同を分析することで、ワクチン一般の接種をめぐる要因について、より詳細な分析を提供できる可能性をはらんでいる。
3. 接種の有無を問わず、自身と異なる立場への寛容性が示されたことから、HPV ワクチンが「個人防衛」なのか「集団防衛」なのか、予防接種法における位置付けを再検討を迫る可能性がある。こちらも新型コロナワクチンと、HPV ワクチンでは異なる寛容性を示す可能性があり、注意しながら分析を進めていくことが重要となる。

6. 今後の展開

現時点でのインタビュー調査の分析は暫定的なものであり、今後はさらに多様な背景を持つ研究参加者を確保し、インタビューを進める必要がある。また、接種グループと非接種グループの差を

探るだけでなく、従来の質問紙調査では明らかにならなかった対象者の独自の価値観を探索する方向での分析を検討している。さらに、インタビュー調査から明らかになったテーマについてアンケート調査を実施し、実際の接種判断と価値観の関連性を検証していく予定である。アンケート調査では、科学への信頼性や政治信条、スピリチュアリティなど従来の日本での調査ではあまり焦点が当たっていないが、国外の調査ではワクチン接種の傾向との関連が指摘されている因子についても、検証を行なっていく予定である。

2. 発表（研究成果の発表）

広瀬一隆、瀬戸山晃一、大西香代子、舟木友美
「HPV ワクチン接種のキャッチアップ対象者の意思決定に関する価値観の質的調査に基づく倫理的検討」 2025 年度日本生命倫理学会、岩手県盛岡市